

2022年5月

5月になりました。少しずつ、新しい学年やクラスに慣れてきたでしょうか。

こんな短歌があります。

「漠然と恐怖の彼方にあるものを或いは素直に未来とも言ふ 近藤芳美『埃吹く街』

(『大人にまるまでに読みたい15歳の短歌・俳句・川柳 ②生と夢』佐藤文香編 ゆまに書房 2016 p.12)

私は、詩はともかく“短歌”というもののことは、大人になってからもほとんど知らないままでした。

そんな私が短歌に興味を持ったのは、美容室の待ち時間でたまたま読んでいた雑誌「ダヴィンチ」に掲載されている穂村弘さんの特集「短歌ください」が面白かったからです。この特集は出されたお題に沿って投稿された短歌に、穂村さんがコメントをするという形式で毎月掲載されています。そのとき読んだ短歌がどんなものだったか、今では覚えていないのですが、色々な年代の様々な人が5・7・5・7・7の言葉に込めたことが、ものすごくよくわかったり、全然わからなかったりして、「短歌って、音のリズムもいいし面白いものなんだな」と思いました。

今月紹介するのは、『短歌は最強アイテム 高校生活の悩みに効きます』（千葉聡著 岩波ジュニア新書 2017）という本です。

国語科の教師であり、歌人でもある千葉先生こと「ちばさと」は、この春から異動で進学指導重点校である横浜市立桜丘高校に着任しました。国語科準備室の前には、小さな黒板が置いてあり、ちばさととはそこに「今日のおすすめ短歌」を書くことにします。記念すべき一首目は、「銀色のペンキは銀の色でなくペンキの色としての銀色（柗野浩一『君の鳥は歌を歌える』）」(p.23) 毎日黒板に短歌を書くうちに、生徒たちから声をかけられるようになって…

というまるで物語のように読み進められる本ですが、著者 千葉聡さんが実際に経験したことを書いた“青春短歌エッセイ”です。“高校生活の悩みに効きます”とありますが、中学生も読める内容だと思います。

実はこの小さな黒板は他の先生方が連絡用に使っていた黒板で、後でそのことを知ったちばさと先生はこんな短歌を思い出します。「もう俺は今日から生まれ変わるのに昨日のことで怒られている（尼崎武『猫背の星』）」(p.28)

この短歌を読んだとき「めっちゃわかる！」と思いました。他にも、「もう一度考え直さねばならぬ ワンブロックごとにほどける靴紐（中沢直人『極園の光』）」(p.133)というのも共感できます。

ちばさと先生の短歌連作から…

「じゃあこれは短歌でしょうか「 」←正直者にしか見えません」(p.16)

「優しさは辛い心が生んだもの 俺のメールは超優しいか？」(p.116)

というユニークで面白い短歌もあります。

ちばさと先生の生活のどんな場面でこれらの短歌が登場するか、ぜひ読んでみてください。

「短歌を詠む。自分の思いを歌の言葉として残す。それによって高校生活のさまざまな出来事は輝きを帯びるだろう。また、短歌を読んでくれた誰かが、作者の心に共感したり、作者を応援したりしてくれるようになる。短歌は人と人の心をつなぐ最強のアイテムなのだから。」(p.184)

このように話すちばさと先生の学校生活は、ご本人が歌人ということももちろんありますが、確かに生活のなかに短歌があって、人と人の心をつないでいると感じられました。

“短歌”とは何か、形式とルールとか、良いとか悪いとか、色々考えると難しそうですが、読むだけなら簡単です。

普段短歌をつくってみることなんてありませんが、短歌の本を読んでいると、自分の気持ちも5・7・5・7・7になっていないだけで、本当はこういうことが言いたかったのかもしれない！と思わせてくれる短歌がたくさんあります。これまで機会がなかった人も、なにか一冊、手に取って読んでみてください。面白いですよ。